

黒羽芭蕉の館だより②

このコーナーでは、毎月一回、黒羽芭蕉の館の催し物や収蔵・展示資料などについて紹介していきます。

『おくのほそ道』



俳聖松尾芭蕉(1644~1694)が、46歳の時(元禄2年・1689)に敢行した5カ月間もの東北・北陸方面への旅を踏まえ、その後執筆したのが傑作『おくのほそ道』です。

『おくのほそ道』諸本の関係については、まず芭蕉自筆本があり、それを忠実に写したものが曾良本(曾良旅日記とともに伝存した写本)です。曾良本に対する芭蕉および素龍(能書家)の補訂を経て、芭蕉が素龍に清書させたのが、元禄7年(1694)4月成立の素龍清書本(西村本)で、ほかに素龍筆別本(柿衛本)も存在しています。



『おくのほそ道』(版本)

これら諸本のうちの素龍清書本(西村本)を底本として、元禄15年(1702)、京都の井筒屋から出版されたことで、『おくのほそ道』はベストセラーとなり、江戸時代を通じて、版を重ねていきました。

今回紹介するのは、この井筒屋本の系統にある『おくのほそ道』(版本、当館蔵)です。江戸時代後期の出版と考えられ、寸法は縦19・4cm×横13・6cmで、全部で54丁からなっています。

表紙をめくると、「次田氏印」という印文の四角い朱印(1・9cm四方)が捺されています。この本は、旧黒羽藩士大沼家出身で歴史小説家の次田万貴子氏(1916~1997)旧蔵本で、平成9年10月にご遺族から当館に寄贈されました。

本資料については企画展などで展示したことがあり、今後も機会を捉えて展示していく予定です。また、昨年10月から今年の2月にかけて、当館研修室にて講座「近世の版本で読む『おくのほそ道』(全10回)」を開催しましたが、その際テキストとして使用したのが本資料でした。

ちなみに、講座「近世の版本で読む『おくのほそ道』」は、「陸奥篇」として、4月から来年3月にかけて続行する予定です。

問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊⑥

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

野崎工業団地の一角にある下石上公園。この公園の南端にある土手上に設置してある彫刻です。

この作品は、作者の出身地であるメキシコの神話をもとにして制作されたものとされています。メキシコの神話には、神への捧げ物とし



ホルヘ・デ・サンティアゴ氏

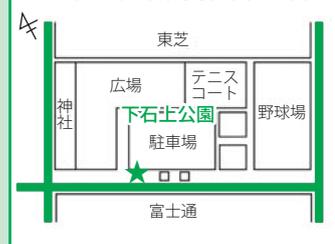
て生きた心臓を捧げるという話が出てきたり、一匹の蛇が登場したりします。作者はその「蛇と心臓」は「現世と霊的な世界」を表わすものと捉え、この作品によって

「この二面性をいくつかの幾何学的な二つの要素を用いて表現すること」を試みたといえます。

そう言われてみると、直線や弧といった幾何学的なものの集まりが、何となく一匹の蛇が頭をもたげとぐるを巻いているように、また、心臓の形のようにも見えてきて、不思議な感覚にとらわれます。

作者は、1954年メキシコ生まれのホルヘ・デ・サンティアゴ氏。同国の国立造形芸術研究実験センターを卒業し、同国内で多数の公共事業に参加しています。

設置場所案内図(★印)



『コア・ヨロトウル シントウル(蛇の心臓)』
ホルヘ・デ・サンティアゴ(メキシコ合衆国)
2009年

問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718